

龜の兒頂戴

かはぐち

浦島太郎の繪を見ると、大抵には、其乗つて居る龜の耳を恰も仔猫のそのやうに描いて居る併し實際龜にはあのやうに角の立て人目につくやうな耳がない。又尾の方に大層な簀のやうなものを曳いて居つて丸で人の鬚の叢生したやうに髪の毛か肉條かが生えて居るやうに描かれて居る。けれども實際おれは龜の體に必ず生ゆるものではなくて、唯長命して居る間に其甲殻に苔や海藻が生えて、龜の泳ぐにつれて後方に曳いて居るのである。それを奇麗に繪に描いた丈であつて、實物には不規律に海藻の長いや短いのや緑の苔や褐色の鹿角菜のやうのや、嫁肌貝や殊に牡蠣などは澤山にひつつて居る。

夜のまだ明けやらぬ三時頃、黒鯛釣船に乗つて磯を少し離れて、釣塲所をソツトすかして見渡すと、六七間彼方の小岩がツブ／＼と徐ろに見えなくなることもある。見れば十間許向ふの小岩も亦

沈みつゝある。靜に漁師に尋ねると、それは龜様だといふ返事が極めて恐しそに遠慮した聲である。成程其龜が水面に出して居つた甲の大きさでも一坪位の面積を占めて居つた。實は夜の明けない間にスカシ見て、少々大いから氣味がよくない全體を現はしたら四疊敷もありさうな龜に睨まるゝと假令敵意のないものとは知りながらも、場所な場所なり時は時なり、何だか油斷のならぬやうな感がする。但し漁師共は龜の性質を知つて居るから別に怖るゝわけではないが、唯彼等の間の風習として龜を割合に尊敬して居るのである。

併し海龜で普通に大きいといはれて居るものは幅三尺長四尺ばかりの甲殻を負ふたものである。即ち普通の疊一枚より少し短い位のものである。此位の龜ならば、時機によりては陸上で目撃することが出来る。彼等の産卵期には日御崎から田邊灣へかけての海濱で、濱邊の若者などに捕つてイデメられて居るのを實見したことが度々であつたが、捕へるといつたとして一人二人や三人で捉たとて、龜公逃げやうと思へば平氣で逃げ出す、三人

位なら負ふたまゝで逃げる、少しでも波のかゝるところに歸れば最早人力では何とも致方がない。夫故に若者共は陸上……といつても濱の真砂の上……で發見したならば、龜の油断を見計つて桿でこねて之を裏返す、腹背ひつくりかへれば大方の龜公も全く力の出しやうがない、手を出さば敵かち、足を出せばうたる。仕方がないから、急に逃亡の野心も出さずに、静にして居る。若者共は力自慢に此龜を提げやうとしたり擔いでみやうとしたりして、嬉々としてなぐさんで居る。中には此龜を捕へて屠つて、肉をとり甲を賣るを商買にして居るものも稀にはある。肉は滋養に富んで居り甲殻は鱈甲ほどに上等でないけれど様々に利用せらるゝから、相當の利益があるであらうが、併し此殺生は多數の人々に嫌はれて居る。殊に老人などは何時も捕つた龜をかばつて、買ひとつてでも逃がしてやる風になつて居つて、「龜屠りは決して仕合よく暮すことが出来ない」といふ口傳が出来それが自づと龜の保護法になつて居る。

頃は陰曆五月の中頃、麥秋の拂曉、鳥よりも雀

よりも先きに起き出て、麥藁の間を露踏み分けて濱の松原に出て、木立を楯にとつてソツと濱の波寄する渚を見渡すと、静かなる夜明けにも捲いて来る浪ばかりは、サラ／＼と神氣のセイ／＼する獨語を繰返して居る。シャブと異様の浪の響が吾輩の隠れて居つた木立の直ぐ下なる低平な沙上にしたと、氣づいて、微明にすかして覗へば、確に注文通りの龜である。大さ方四尺にあまるものである。其不恰好な頭を延ばして、前後左右を警戒しながら見廻はして居る。斯くて五分許も經つたと思ふ時分に、愈龜さんノソリ／＼と沙上に上つて來た。誠に大嵩なもので、其ギロ／＼見廻はす眼付が薄氣味わるいほどであつたが、頓がて、波際より二尺許のところの静に蹲つた。熟視すれば、後脚で真砂を掘つて居るやうすである。頓がて可なり大きな筈の十分嵌りさうな大さに掘り込んだと思はしい頃、掘方中止をして暫し落付いて、それから其穴の内へ、彼の尾のあたりから何かをコロ／＼と落とし込むやうである。その又薄黄色の球が追々に穴に填みちて來るやうすである。

さうかうする中、潮がさして来て、龜の尾に波が
かゝる頃、コロ／＼が出でなくなつた。龜は再び
起つて又水際より沙上を斜に二尺あまり、高さに
しては三四寸の處に匍ひ上つて、再び穴を掘り始
めた。其中早や先さの黄色なものを入れ込んだ穴
が、波の爲に砂をかけられて、丸で平に一面の沙
上となつた。茲に至つて、吾輩は、實地見分の爲
に今少しく龜さんに接近しやうと苦心し始めた。
龜さんの第二回目穴の穴もそろ／＼完成に近いで熱
心に掘つて居らるゝ、到頭復た靜に座つた。復た
コロ／＼か、然らば其コロ／＼は何物ぞそこで。
吾輩は極めて靜に一大迂回をなして龜さんの尾の
方向、約三百米突彼方に出で、拔足差足、龜さ
んの方向に近寄つたのである。近寄つてみれば、
全く龜さんは俯いて熱心に黄色なものを落しつゝ
ある。假令多少吾輩の沙上を踏む恐び足の響に不
審を感じて左右を顧みて偵察するにしても、龜さ
んには氣の毒だが吾輩には至幸至福なことには龜
さんの甲が高いので後の方へば展望が十分には利
かないのである。夫故に我輩は思ひの外にも龜さ

んの直ぐ尾の側まで接近することが出来たのであ
る。見れば龜の甲といはんよりも磯の岩といふ方
が適當でありさうに海藻や貝殻がついて居る。後
脚や尾の表面は眞黒な石垣のやうに見ゆる。連も
東京あたりの縁日に賣つて居る水龜や、大阪天王
寺の堀に飼つて居るそれや、山奥の獵師の腰に吊
つた火藥筒などになつた甲殻くらゐを見た丈の人
には一寸想像に浮べにくい。其五稜廊の石垣のや
うな後ツ尾のあたりから、見る／＼うちに、コロ
リ／＼と落ちつゝあるのを今見れば、鶏の卵に比
べては少し小さいまゝなる李か杏のやうな黄色
な卵である。序のこと故、御免を蒙つて、豫て携
えて居つた小深い筈を巧に龜さんの掘つた穴に嵌
めて、最も輕便に、龜さんの尻のところへ筈の口
を受けておくと、龜さんの尾のあたりがブツリと
音がしたと思ふと眞圓い黄ばんだ卵がコロリと筈
の中へ落ち込むブツリコロリと音のまに／＼
五十ばかり生んだが、未だ止まぬ、百あまり生ん
だが未だ止まぬ、吾輩は初めの中こそ、之が研究
だとか實驗だとかいふ念慮が強かつた爲に別に何

とも思はなかつたが、考へて見れば龜のかいどの
 わたりから落ちて来る玉をば、自分は今箆を捧げ
 て、所謂龜の兒頂戴をして居るのだといふにも
 思へて少しイヤになつた。併し學校の先生あたり
 から、なる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪
 忍、と教はつたことを思ひ出して、辛抱して、通
 計二百八十三個目の卵がコロリと落つるを認め
 た刹那に、「オイ僕にも受けさせ」と唐突に小聲にい
 ふ者があつた、小聲ではあつたが、四邊が波より
 外に音のない拂曉のこと故、吾輩はハツと思つた
 が、見れば日頃の腕白連の一人であるから、眼く
 ばせて暫し待たさうとすると、彼腕白奴「さう
 なら僕に其箆のまゝに受けて見させて呉れ」とね
 だるから、平素謙遜な吾輩は茲でも亦靜に友人と
 交代して箆をそのまゝ彼に手渡してやつたが、受
 取つた友人は、ブツリと音のするのを珍らし
 がつて黙つて大恐れで箆を差出したと見えた其一
 瞬、誤つて箆の縁がコツツ龜の尾に當つた。流
 石の龜さんも、やつと氣付いて少し怪しいと思つ
 たものか、スーツと異様の空氣を洩すと同時に慌

て、ドサと浪際から海の中に逃げ込んで終
 つた。後に残つた友人は失望した様子で切に吾輩
 に申譯をするから「ナニ君は御しまいまで受けて
 くれたのだから御苦勞であつた」と感めてやると
 彼吾輩に向つて言ひにくさうに、「僕にも少し此卵
 を分けて呉れ」といふ。吾輩はそこで試に彼に對
 して、「君が受けてから幾個産んだか」と問ふと、
 彼は唯の三個で四個目が玉でなくて異様な風で
 あつた」と正直に答へた。そこで我輩は「承知し
 た、龜の産んだ半分をやる」といつてやると、彼
 友人眼を丸くして此半分も僕に呉るか」と驚喜
 の態である。そこで吾輩は念を推して「此半分で
 ない、彼の龜の今朝生んだ半分をやるのだ」と申
 聞けて、少しシャブの、水際に入つて、前刻の
 第一回の産卵場にして今の全く平面となれる沙面
 をさぐつて、其友人と共に砂掘り分けて拾ひ出し
 たのが三百四十個。前後通計六百個。約束通り半
 分宛にして一人前三百個。分配結了して、扱相携
 えて歸らうとして見上ぐれば、まだ日は出ないが
 並樹の松では小鳥が早や起て居る。漁師共は早や

網の整頓をするやら、遠く海上の色見をして居るやらで、チラポラ行き交ふて居る見付られては不ダラル、かも知れないと早速二人は逃ぐるやうに走せ歸つて、假寓に入らうとしたが、途中、其友人の建議に基き暫く友人の假寓なる前栽の砂場の一隅なる日當りのよいところに穴を掘つて、人知れず軽く埋めて隠しておいた。實は處分法の困つた結果であるのである。

後日濱に通つた堀河の岸で女兒供や年寄等が寄集つて、何か賑かな様子である。行つて見ると、二錢銅貨ほどの龜の兒に一々酒を飲ませて水に入れてやる老人が群集に蹲つて居る。全く友人の寓所の隣の老人であつた。一つ二つと籠の中から數へつゝ、飲まして放す。放され仔龜は一旦沈んで必ず一度水面に頭を上げて再び沈む。それから復と浮いては來ない。老人は説明して、龜を放してもらつた御禮をいふのだといつて居る。後年に至つて考ふれば之は龜が陸上で呼吸して居つたのが急に水中に放さるゝことになつた爲、放された當時は水中で呼吸が苦しいから一寸水中呼吸に慣るゝ

ままでに一息吹きに來るのであることが分つたが、當時は其老人の説明を感心しつゝ、聽いて居つた。其中龜についていろ／＼な質問が八方から其老人に對して起つたが、何故近頃此近傍に龜の子が多いのだらう、といふ質問に對して老人が「ドウも分らぬが今朝など隣の垣根から三十も四十も連れて匍つて來た」と語りつゝ、砂まみれの仔龜を「これもさうだ」などいつて放して居る。之を聞いた一瞬、吾輩は一目散に例の友人の假寓に駆けつけて相携えて前日の砂場に行つてみると、卵は全くない、あるものは薄いその皮ばかり、考へてみれば僅に十日許の間に地熱と太陽の温度丈で十分に孵化して、被つて居つた砂を押のけて總員六百思ひ／＼に解散してしまつたのであるらしい。斯うと豫め知つたなら少しは工夫つゝあつたものと思へど、今は詮方もない。二人は小供心にも馬鹿々々しくて、黙つたまゝで、眼を圓くしたまゝで暫し詞も出なかつた。

人の話を聞くととはなしに聴けば、龜は全く自然の温度で孵化する。産卵の後一週間にして確に化

する。化した仔龜の大多數が濱の砂倉から這出で、直ぐ海中に泳ぎ出で、或は章魚に喰はれ鯛にくはれて、生立つものは誠に少い。それで卵の數の多い割合に、海には龜の數が少い、といふ話である。六七月の候、汐干狩に磯に行つた時、注意して見たまへ、稀には可愛い龜子君の泳いで居るところもあらう。

以上、龜の兒頂戴に關する話、如件。淡水に産する水龜又はスツポンなどの習性などに關しては別に項をかいて話さう。



喜多方行

川口 得

命を承けて、七月十三日より數日間、保育に關する實地指導の爲、福島縣下喜多方町に赴きしてとあり。

郡山より出で、岩越線の鐵路により、西に向へば、汽車は堀の内安子が島を經て熱海に進む。阿武隈沿岸の平野茲に盡きて、群山漸く路に迫る。

中山時にかゝれば、道の勾配急にして汽車の歩みゆるやかなり。數分間の暗をたどりて其の隧道を

出づれば、山いよく深くして墻壁をなし、大小の瀑流かして此處に懸りて、風、夏を洗ふ。此邊、冬日雪よけの爲にとて造られたる、板がこひの隧

道様のものの、今も残れるはまた異觀なり。

山瀧、關のと、川桁はなほ山路ながら、猪苗代より翁島に至る間、田甫や、開けゆきて、畔に生いたる櫨の木、繁りみどり深く、其木がぐれに、折

々のぞむ猪苗代湖は、漣波はるかにしてさながら海なり。磐梯山は北の方にて、雲際に聳えたるが、